

廃校活用と持続可能社会への貢献

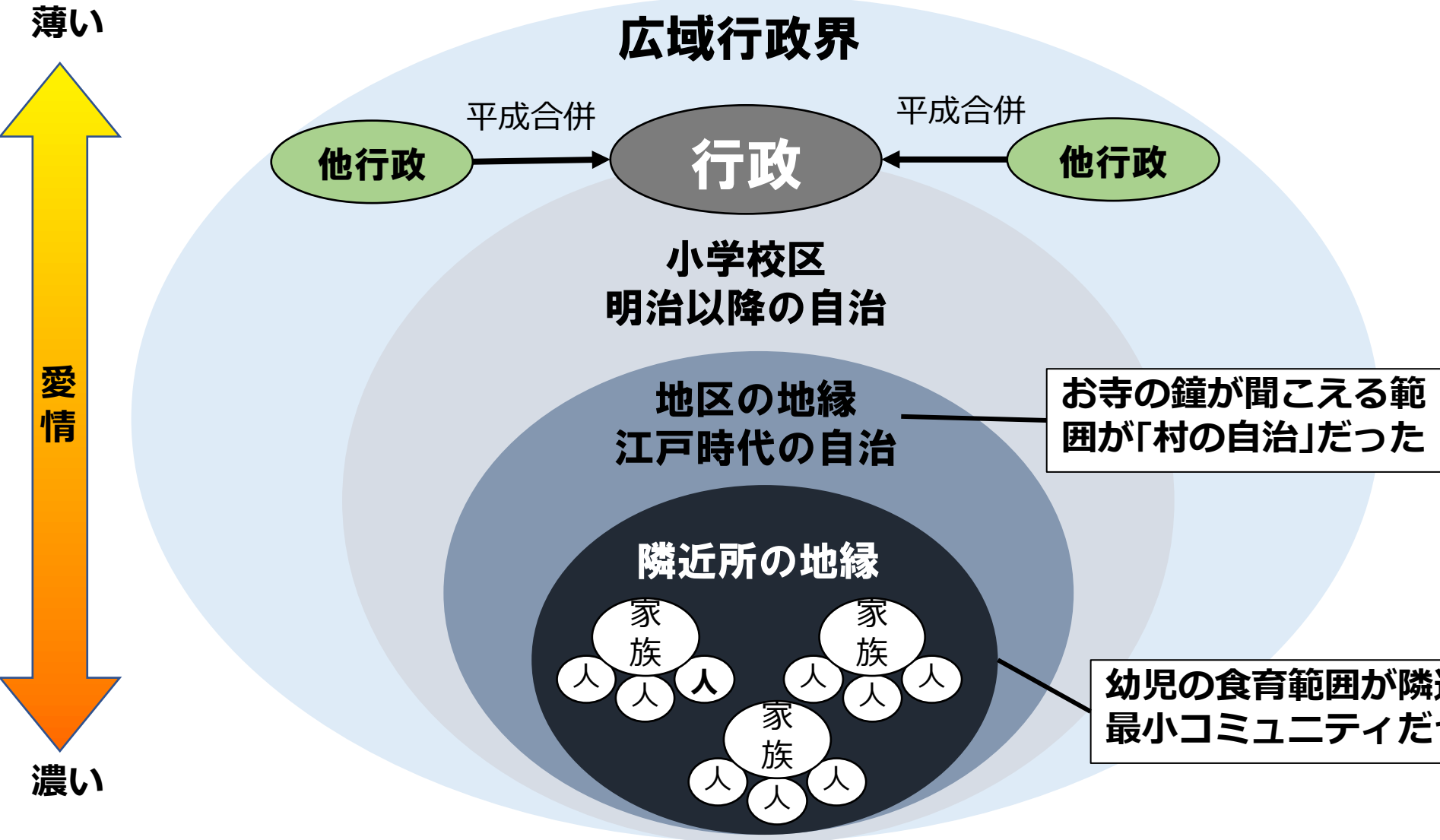
～小学校に限定して思考する～

観光カリスマ百選、総務省地域力創造アドバイザー
内閣府地域活性化伝道師、ふるさと財団地域再生マネージャー

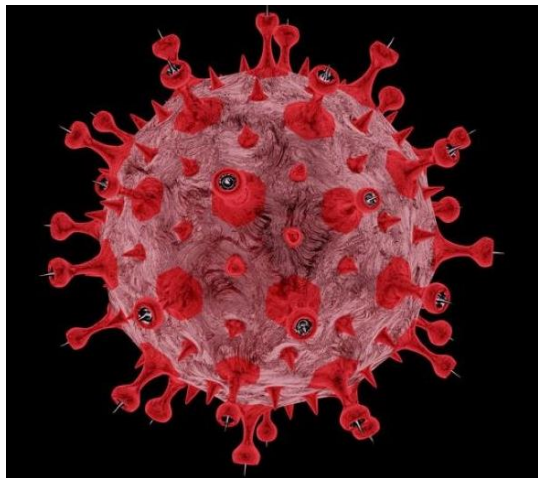


<http://tiiki-saisei.jp>

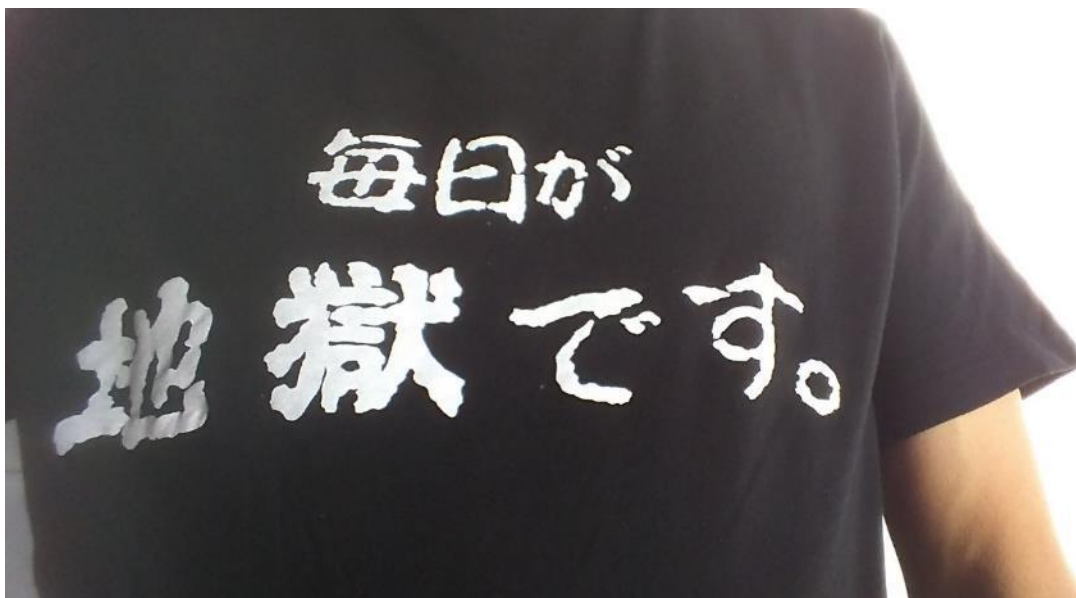
合併で住民の顔が見えなくなった行政。ゆえに再度、村の自治から編集し直すこと。
今の状態に適応するのではなく、新たな未来を創ることが大切。
そのために俯瞰的・歴史的な視座から、多様な選択肢を持つことが、学校区の未来の形



昨日までの正解は、明日の正解ではなくなった



日本の総人口はどんどん減っている
⇒消費は冷え込み、特に地方に影響が出る
⇒国民に消費を促しても伸びる気配がない
株価は好調だが、
⇒物価高に賃金上昇が追いつかない
⇒庶民の生活は苦しくなるばかり
⇒生活に仕事にストレスを感じる



コロナ禍で世の中が激変したが、インバウンドの観光暴風が再び暮らしを再び脅かしている。
地方は農山漁村を中心に人口減少が止まらない。
新たなパラダイムに入った現在、従前の形の学校区ではなく、コミュニティの全てに恩恵があり、皆が満足できる暮らしを模索することが求められる。

なぜ次々と廃校となるのか??

自分たちの手で子どもを都市に追い出しているのに、

- ・ 少子化で子どもが欲しい、子育て世代に移住してもらいたいと願う矛盾。
- ・ 廃校が決まってから残せと叫ぶ矛盾。

こうした学校区に限って自分たちは動かない行政依存の住民ばかり。

社会が悪い、行政が悪いのではなく、自分の子どもたちを外に出した者が、最初の責任を取らなければいけない。

移住を促す行政の謳い文句も

「住みやすい」「子育てしやすい」とPRするが、少子化しているのはどういうことか？

これは完全に地方自治体の**移住詐欺**です！



まずは廃校にしないことを考えよう

教育的・財政効率化から統廃合は少々短絡的

コミュニティが弱体化したことが先か、それとも廃校になりコミュニティが弱体化したかは不明だが、小学校区の統廃合は、地域社会を立ち直れないほど破壊する可能性がある。

少子化による下振れリスクが顕著に出ているのは間違いないが、これを放置することは学校区の衰退を助長することになる。

学校は地域の誇りであり、誇りが消失することは地域そのものを失う

保育園を閉園、小学校を閉校

**子育て・教育環境が悪化しているところに、子育て世代は移住したいと
考えない！**



学校を廃校とする前に、慎重に考慮すべき点

1. 学校の状態と施設の評価：学校の建物や施設の現状を評価し、建物の安全性や改修が必要な場所を特定する。また、土地や建物の市場価値も考慮すること。
2. 学校の教育品質と生徒のパフォーマンス：学校の教育品質や生徒の学力向上の状況を評価する。もし問題がある場合は、改善するための手段を検討すること。
3. 生徒と教職員の影響：廃校が生徒や教職員に及ぼす影響を考慮する。近隣の他の学校に収容する場合は、通学距離や交通アクセスを検討し、適切な配慮を行う。
4. 地域の需要と人口動態：地域の将来の人口動態や教育需要を考慮し、廃校が地域全体に与える影響を予測すること。
5. 財政的側面：学校を廃校にすることによる経済的な側面を考慮する。節約できる予算や廃校処理にかかるコストを分析すること。
6. コミュニティとの協議：地域の利害関係者や関係機関との協議を行い、廃校に関する意見や提案を収集する。
7. 代替策の検討を行う。廃校を回避するために、他の選択肢を検討する。
例えば、学校の特定のプログラムや施設の再利用、他の学校との統合などが挙げられる。
8. 法的要件と手続きを確認する。学校を廃校にする際には、地方の法的要件や手続きを遵守する必要がある。これには、教育当局への通知や合意形成などが含まれる。

これらの事項を検討し、慎重な判断を下すことで、地域の教育環境やコミュニティに対する影響を最小限に抑えることができる

休廃校してしまった学校の活用に向けて

俺たちは身を切ったぞ！後は行政の責任でなんとかしろ！

「あれもこれもやれ！この金を出せ」と言う**行政依存では絶対に良い結果とならない。**

こうした事態を招いたのは「誰か」？

俺たちの学校だと校舎を眺めている分には金はいらないが、維持するにはお金が要る。

もちろん次世代に重くのしかかるのはもってのほか。

ボランティアでは維持できなくなる時期が必ず来る。

次世代に資産として受け継ぐために、この問題は自分たちで解決しないといけない。

**地域に子どもを取り戻し、暮らす“人”を元気にする
これが廃校活用の最大のミッションです！**

地域は**自ら考え創るもの**で与えられるものではない。他者に頼ることはできない。
地域に無関心でいることは、自ら地域の消滅に力を貸すものである。

人口減少の処方箋のひとつは、**少母化**対策

農業は**少農家化**対策を講じる。

なぜ少子化するのか、なぜ少農家化しているのかを、それぞれで検証しないといけない。



未来のビジョンを持て！ – 社会の幸せの基準に立ち返り未来を創る –

地球的には「環境保全」が大義だが、地方では「持続的な暮らし」が大義である。
新規事業の構想では50年後100年後の未来を構想しつつ、10年後の地域のありたい姿を想定する。
不確定な世の中では、未来の状態に適応するという視野でなく、新たな未来を創るという視野が重要。
ただし一直線の結論でなく、多様な選択肢を排除しない。
そのためには俯瞰的な視座、歴史的な視座を持つこと。

廃校活用の中へ、根本の精神として貫きながら、

HOW（どのように）

WHAT（何を）

WHY（なぜ）

を問い続けると**必ず「ひらめき」がある。**



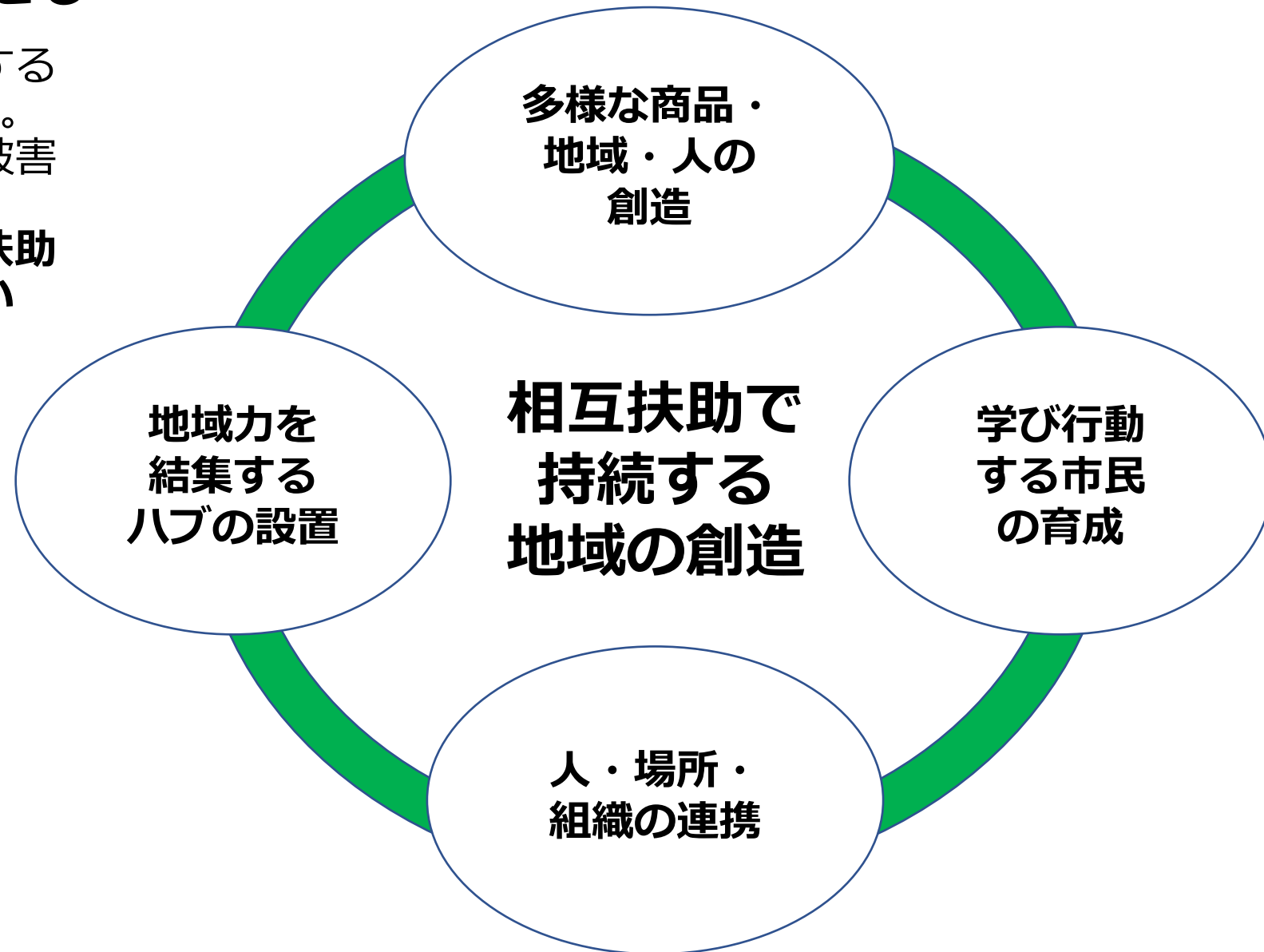
SDGsを基本に廃校活用を考える

- ◎ 地域の自然・文化の持続的環境を創る
- ◎ 地域の持続的な暮らしを創る
- ◎ 女性の活躍の場を創る
- ◎ 文化財保全や伝統技術を継承発展させる
- ◎ 環境に優しいまちづくり
- ◎ 地域教育・生涯共育の場を創る



地域をより良い形で持続させる

生産も物販も「厄災」一つで消滅する
たった1回の災害で一瞬に吹き飛ぶ。
この後はデマにフェイクなど風評被害
の第2次災害が控えている。
被災した地域の支援や復興は**相互扶助**
がしっかりしているところほど早い



地域の存続は家庭、地域の環境改善から

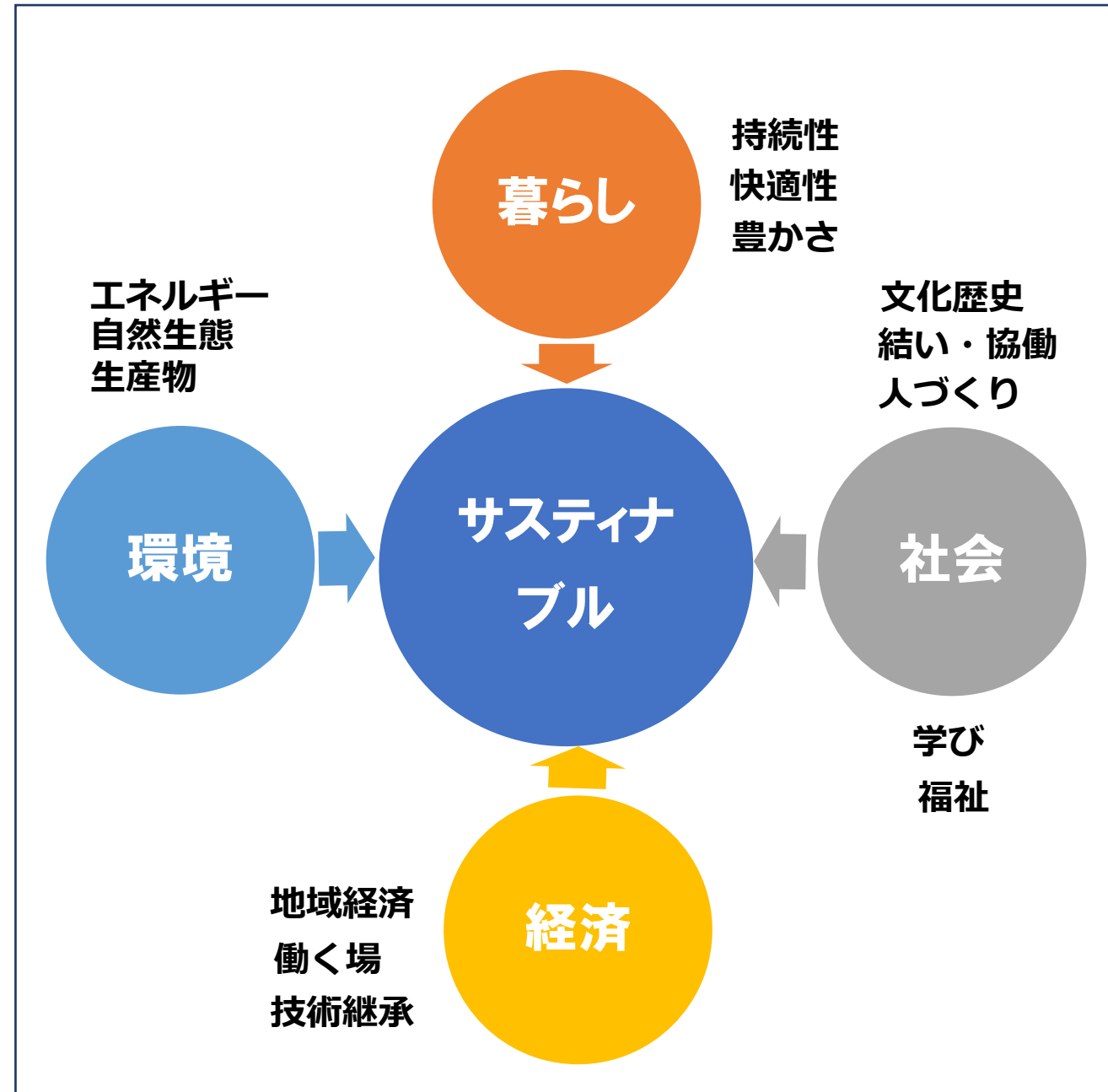
環境は自然環境だけでなく、人間の暮らしの根本部分。

環境問題を断片的に取り上げ、本質的でない対症療法的な対策で、根源的な問題を置き去りにしている傾向がある。

経済成長は他を喰いつぶすと自らを喰う方向に向かい、その間に弱者や地方は格差の井戸に落ちていく。

廃校を拠点に自然・文化・歴史を掘り起こし、新たなビジネスモデルを創造する。

地域の多様性を根本精神として持続する社会へ向けた取組が求められる



行政が共創者としての役割を果たす

行政は財政・教育的な視点のみで判断しない。

廃校とせざるをえなかったのは、何が問題なのかを見極めること。

地域の誇りである学び舎が消えてもその代わりがあれば良い。学校区をどのように再生・振興していくかの仕組みや制度、システムがあれば問題は無い。

地元ではなく**企業や他者に任せるケースが増加**しているが、外から来た運営者は地域に責任を持たない一方で、行政には高額な施設改善を要求することも多い。住民が幸せを実感できなければ廃校活用に税金投入の意味は無い。

「新たな価値の創造」はコミュニティ内の関係性の中でしか生まれない。

地域を守り発展させるには、廃校活用を行う参画者のベクトルを同じ方向に持っていくこと。

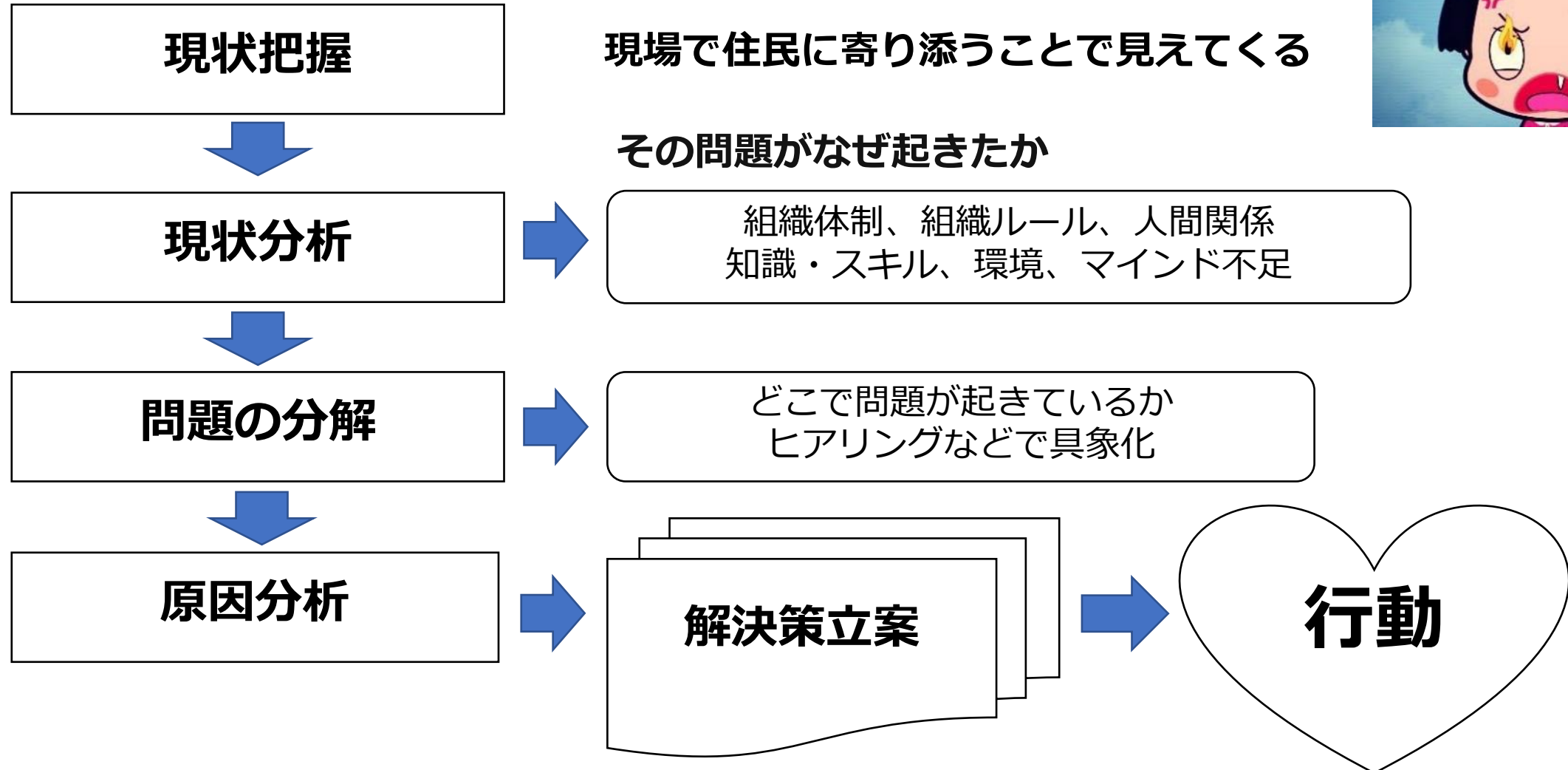
- 地域に内包するニーズ(必要性)やウォンツ(欲求)を掘り起こす活動を支援する
- 様々な主体や個人との有機的連携を臨機応変に促す
- コミュニティのマネジメントを支援し、住民主体のまちづくりを推進する
- 行政は「新たな結い」機能を有する農村RMOの創設、財政支援を行う
- 次世代の人材育成（実践担い手、プロデューサー）

単に金を掛ければ良い訳ではない



課題を再度、整理・分析してみよう

本質的な解決策を導き出すには、具体的事象を数多く集める。
そこから真因を抽出し、解決策を立案する

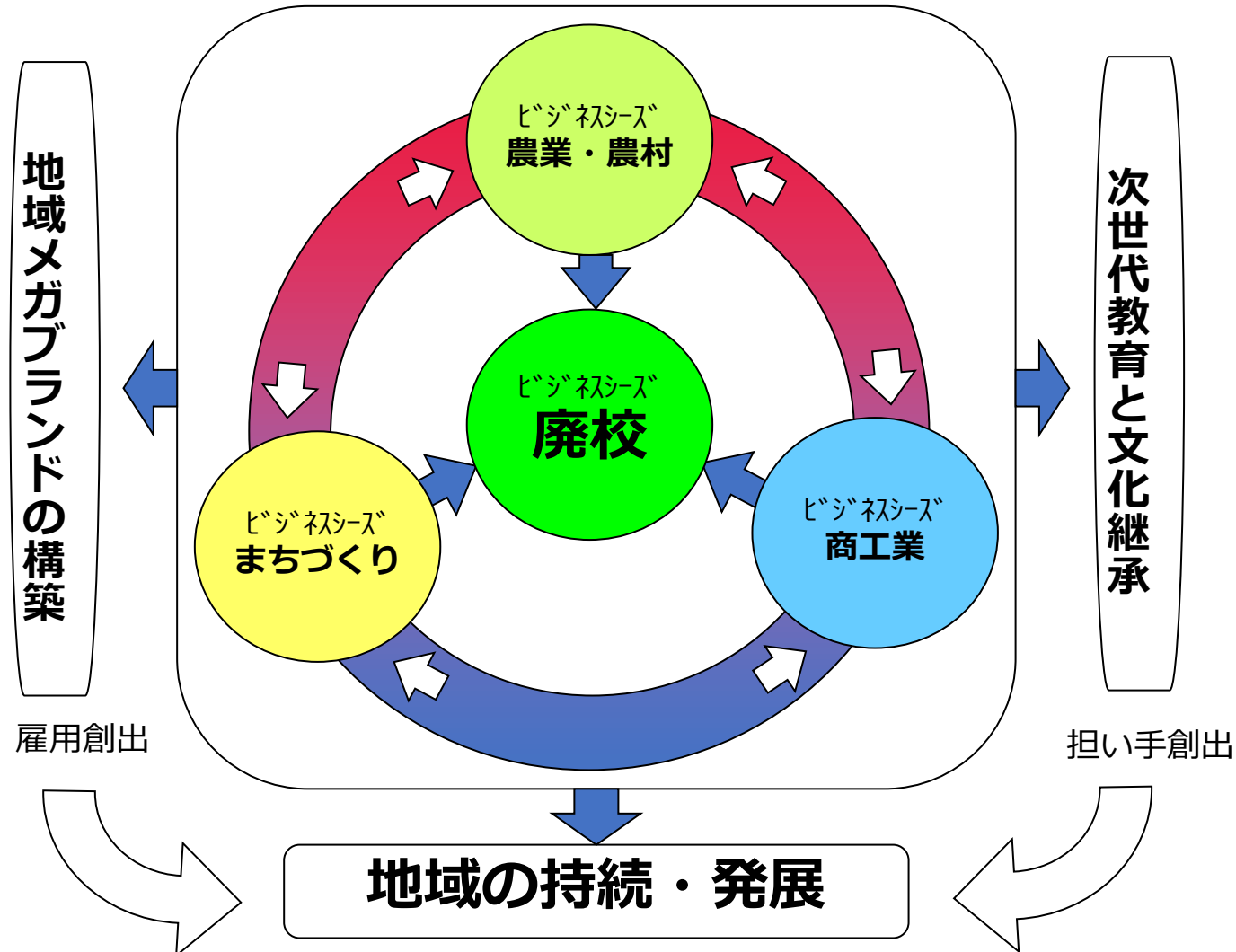


大きな枠組みから地域の風土・生業を活かす

廃校の運営はボランティアとしない。
自立運営するためにきちんとしたビジネス
を興そう。

悠久の歴史文化を繋いできた里地・里海・里山。
多様な思想や技、人を紡いできたまち。
それぞれの地域に、歴史、文化、生業の暮らし
がある。それはどこにも真似できないオリジナル
の風土資源。
この強い武器のエッセンスを取り出し地域オリ
ジナルの風土産業として昇華させ、学区のレ
ジリエンス（復元力）をどう創発するか。

レジリエンスでは、住民に淡い夢や期待を抱か
せるのではなく、本当にできることは何かを突
き詰める。
そのためには、積極的に住民の懸念、ニーズ、
アイデアに応える風土を築くこと。
ただし口先介入でなく、アイデアを出した者が
リーダーで実行する。



事業化までの5段階ステップ



地域づくりとは、

- ・自分や家族が暮らしやすくすること
- ・子どもを産み育てる環境を整えること

そして持続する「ふるさと」として地域の形を創ることではないだろうか？

4つの組み合わせのバランスが大切

まずは「楽しい！自らやりたい」が基本。面白いことがモチベーションになる。
その後に「地域に良いことか」を考える。
そして「持続できる活動」になるか？どこかに依存しなくても継続できるかを考える。
この3つを実現するために、**仕方なくではない協力体制や内外の仲間作りを行う。**

やりたいこと
楽しいこと

地域に良いこと
社会に必要なこと

経済的自立
活動の継続

地域の協力体制
横のネットワークを
持つ

「できない」に未来はない

「課題解決しよう」などと力む必要はない。
まずは地区の現状を知り、目の前の課題を全員が共有すること。

「目指すべき地区」は“**どのような地区**”なのかを確認する。
そこから、置かれた状況を“仕方ない”と諦めるのではなく、自分なりにブレークスルーを考える。



江戸時代から続く
毛馬内の朝市

挑戦のプラットフォームを創り地区から人材を発掘！
“できない”でなくみんなで「やろう」に変える

自ら動くチームを作る

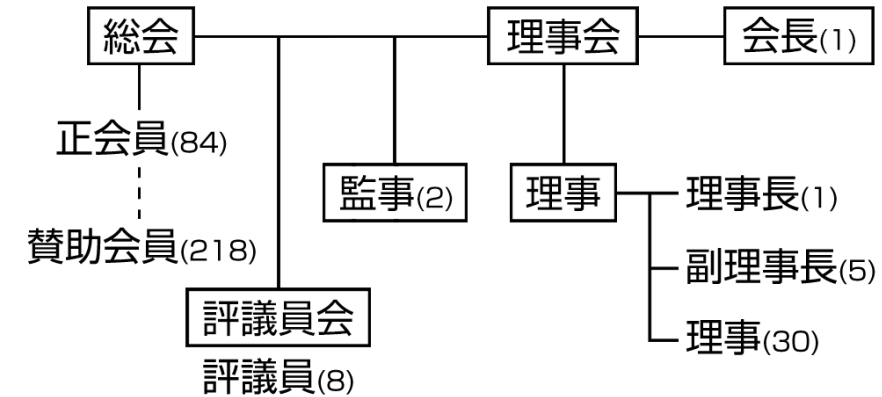
前例踏襲は自ら思考停止状態になる。常に課題を持ち、自ら考え行動することで活性化のきっかけができていく。



140有余年の歴史を持つ南丹市立摩気小学校は、児童数の激減で閉校再編統合された。

学校区では先人が築いた崇高な理念を継承し、旧校舎等の利活用を通じた地域振興について検討。郷土愛の情熱を結集しNPOを設立。教育・文化の向上、農林業などの地場産業の新たな振興、都市住民や、外国人留学生などとの幅広い交流活動を通じた地域コミュニティの充実により、ふるさとの振興発展と住民福祉の増進を図っている。

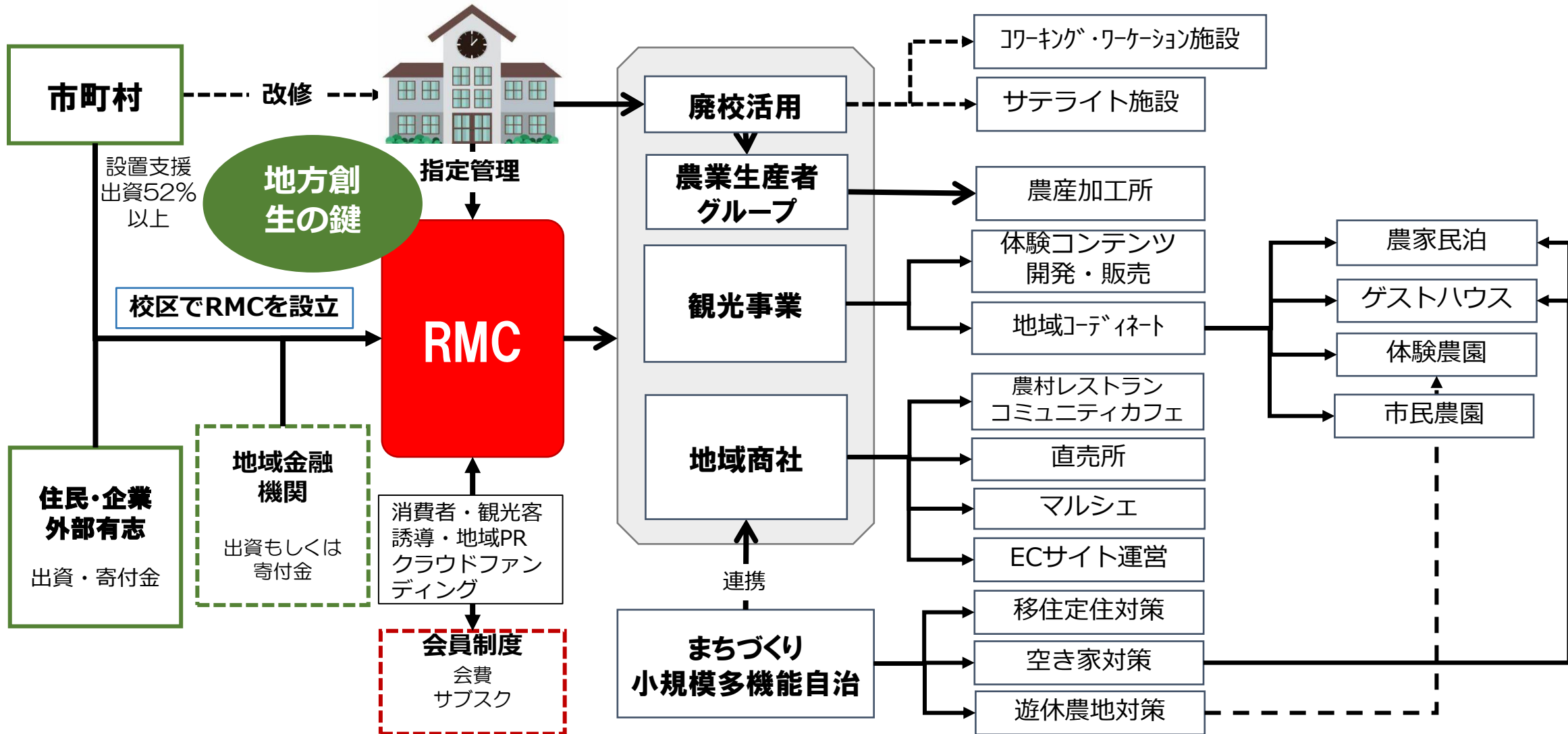
リーダーは運営責任の重要性を自覚し、社会的信頼度の高い組織として有益で合理的な企画運営を行う。



南丹市のNPO摩気高山の郷振興会のリーダーたち

ローカルな「イノベーションcommons(共創拠点)」づくり

例：「周遊」「滞在」「消費」のスムーズなフローを作るために農村RMCの拠点づくり



疑問から活動は始まる

いま起こりつつある事態を理解し、それに対して適切な対策を行えるかどうか、地域の未来を左右する。地域リーダーが不在という課題もあり、完全にコントロールすることは難しいが、「自分たちの地域は自分たちで守る」意識を持たないと学校区は消滅する。廃校活用の意義は学校区の存続である。

中国のことわざに『入りを量りて、出ずるを制する』環境保全やエコロジーが叫ばれる現代、地域から漏れる金や人を地域で循環させ、活性化させる。ローカルこそ最もエコで持続的社会的基礎。そのためには**マネーファーストからヒューマンファースト**へ意識を変え、住民が自分事として捉えるきっかけにしていく。

地域の特性や環境をベースにした新たな仕組みを作り、自らの資源価値を創造。コミュニティにシナジー効果を継続的に与えられる「利他ビジネス」を創発し、循環する社会を構築しよう。

SNSを教え合う高齢者たち



**疑問を持つことは、自分で考えられる最初の一步。
常にチャレンジャーたれ**

挑戦のプロセスが財産となる

AIでは日々の営みの中で、地域を保全する住民の苦労は分からないし、本物の笑顔は作れない。いま、自分の常識（しがらみ）を打ち破る重要な転換点が訪れている。テレビで取材されるような「ポツンと一軒家」にしない！

「失敗」は、挑戦した行動したこと証。**行動せずに「失敗」を心配しても何も生まれない。**成功か失敗かという二者択一で考えない。

その**挑戦プロセスは「成長」となり財産**となる。だから「やったけどダメだった」ではなく、「どこが」ダメだったのかを検証すること。**注目すべきは「成長度」**がどれほどかだ。



成功を求めるのではなく「成長」を求めることが重要

夢が描けない農業や農村に担い手は現れない

持続する農村とは「どのような」ものか？
もともと「むら」は地域ごとで成り立ち、
その考え方も違っていた。
その「むら」と一体となってきた学校。
学校は地域存続のかなめ。
ゆえに農村コミュニティの地域発意を基本
にした戦略とすることが重要。



農業農村は日本が失ってはいけない大事なものを
防衛する最前線にいる



結いは農村社会に残る埋れ火。 相互扶助の哲学である

先人たちの利他の思想として、再度そのエキスを明日の農村づくりを行う。

地域に内包する必要性や欲求を掘り起こす。

新しい知を生み出していく共創関係を創る。

農業や経済活動のマネジメントだけでなく、農村づくり活動の一環に新しい相互扶助として位置づけ、人材育成や住民主体の活動を支援し、持続する農村社会づくりを行う。

そのためには、コンパクトな地域で権限と財源を持ち、地域同士がネットワークを形成することが重要となる。



地方は今、生き残る**チャンス**がきている。

過去に変えられなかった計画や事業、組織、コミュニティを「**ゼロベース**」で検討し**コロナ後の羅針盤を改めて創る**。そして誰もが暮らしたくなる、訪問したくなる連帯の農都共創思想を創り上げる

**「猫を追うより皿を引け」
目先を追うより根本原因を正すこと。
どうすれば、旧態依然とした地域から脱却できるか。
どうすれば、新しいことにチャレンジできるか。
どうすれば、夢を売る地域になれるか。**

**時代の変化は、あなたの都合を待ってくれない。
あなたの都合など“容赦なく”置いていく。
「いつか、いつかと思うだけでは変わらない！」
「行動するのは、今ここしかない！」**